

【本文】

鎌倉右大将、父子ともに代々撰集に入り給ひけるこそ、①(ことにやさしけれ)。なかにも右大将、都へ上り給ひけるに、吉水大僧正、「②(なにごとと思ふばかりはえこそ)」など聞えられたりける返事に、

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石ぶみ

とよまれたる、おもしろくたくみに【3】聞ゆれ。

およそ武士といふは、乱れたる世を平らぐる時、これをさきとするがゆゑに文にならびて優劣なし。朝家には文武二道をわきて左右のつばさとせり。文事あれば必ず武備はる謂なり。かかりければ、【4】にも、後漢の武王は武将二十八人をえらび定められ、麒麟閣をおきて、勲功をしるされける。舜帝の時、八愷、八元と名づけて十六族の文士をえられしがごとし。

③(源順)が右親衛源将軍、初めて論語を談ずる時、

職、虎牙に列す、武勇を漢の四七将に拉ぐと雖も

学、麟角を抽づ、遂に文章を魯の二十篇に味はふ

とぞ書けりける。文武ともなる心なり。

また、唐の太宗、隋の世をとりて④(まつりごとを定め給ひける)時、魏徴、房玄齡等、勅問にあづかりて、守文、草創の二つを分けて、文武のすすみ退くことをぞ、おのおの心の引くかたにつきて、諍ひ申しける。

弓箭の道は、⑤(敵に向ひて勝負をあらはすのみにあらず)、うちまかせたることにもその徳多く聞ゆ。左氏伝にいはく、

買大夫といひける人、形きはめて醜かりけり。めとるところの女、これを憎みて、三年の間ものいはず笑はざりければ、

男、⑥(歎き恨みけれどもかひなかりけり)。野に出でて遊ぶ時、一つの雉を射てこれを得たり。その時、この妻、はじめてうち笑みて、ものいひける

となむ。

(十訓抄より)

【注釈】

※壺の石ぶみ……………青森県上北郡天間林村にあったとされる古碑

※朝家.....朝廷

※魯の二十篇.....魯出身の孔子の『論語』二十篇を指す

※魏徴、房玄齡.....ともに太宗に仕えた唐の廷臣

※左氏伝.....中国の歴史書『春秋』の注釈書『春秋左氏伝』

【問題】

問一 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 琴の演奏に才をもつ
- 2 他人に寛容である
- 3 まことに風流である
- 4 優しい言葉を使う

問二 傍線部②は「思ふこといな陸奥のえぞ言はぬ壺の石ぶみ書きつくさねば」の要約になっている。傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 何事につけても、心で思っているほどは言いつくせなくて
- 2 何かあるたび、心で思っているばかりでは解決しつくせなくて
- 3 何に関しても、心で思う程度のことは蠅にさえわかるけれど
- 4 驚くような出来事も、思ったほどには反応していないけれど

問三 空欄 [3] に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 こそ
- 2 なむ
- 3 や
- 4 ぞ

問四 空欄 [4] に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 やまと
- 2 かまくら
- 3 みちのく
- 4 もろこし

問五 傍線部③を含む「梨壺の五人」の編纂とされるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 古今和歌集
- 2 後撰和歌集
- 3 拾遺和歌集
- 4 新古今和歌集

問六 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 政治を司られた
- 2 祝日を制定なされた
- 3 奉る対象を選んだ
- 4 不安を祭で鎮めた

問七 傍線部⑤のようにいう理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 相手を打ち負かす行為の中にも人徳は必要とされるから
- 2 容貌が醜い男であっても鳥を射落とすことができるから
- 3 弓道の精神は敵へ向けて矢を放つことにこそ表れるから
- 4 ありふれたことの中にも武芸の徳は多く見られるから

問八 傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 嘆いて恨むばかりだったため、甲斐性のない人とされた
- 2 悲嘆し仕返しをしたかったが、そのかいもなく終わった
- 3 悲しんでうらめしくも思ったが、どうしようもなかった
- 4 たとえ泣き羨んだとしても、その効果は得られなかった

【解説】

問一 正解:3

(重要単語: やさし)

古文単語の「やさし」を、現代語の「優しい(親切だ)」と捉えたらOUT。

古文における「やさし」は、「優美だ」「風流だ」「上品だ」という意味が中核だ。

文脈を見よう。武士である右大将(源頼朝)とその父が、和歌の「撰集(勅撰和歌集)」に入っていることを褒めている場面だ。「琴」の話も「寛容」の話もしていない。

「武士なのに歌集に入るなんて、風流で殊勝だ」ということだ。よって3。

問二 正解:1

(重要構文: え～(打消))

ここは文脈把握に見せかけた、純粋な文法問題だ。

「え」という副詞を見たら、下に打消語(ず・じ・まじ・で 等)を探すのが鉄則。

「え～(打消)」で「～できない(不可能)」と訳す。

本文には「えこそ」とあり、下が省略されているが、係助詞「こそ」の結びとして、打消の言葉が省略されていると見抜かなければならない。

引用されている歌にも「いはで(言わないで)」「えぞ知らぬ(知ることができない)」とある。

選択肢の中で「～できない」という不可能のニュアンスを含んでいるのは、1だけだ。

問三 正解:1

(文法: 係り結びの法則)

空欄の直後の「聞こゆれ」に注目せよ。

「聞こゆ」はヤ行下二段活用(ゆ・ゆ・ゆ・ゆる・ゆれ・ゆよ)。「ゆれ」は已然形だ。

選択肢の中で、結びを已然形にする係助詞はどれか。

・2「なむ」、3「や」、4「ぞ」 → すべて連体形結び。

・1「こそ」 → 已然形結び。

一瞬で1と決まる。

問四 正解:4

(古文常識:異称)

文脈を見る。「後漢」「舜帝」などの語句が出ている。明らかに中国の話だ。

古文で中国を指す言葉は「唐土(もろこし)」だ。

1「やまと」は日本、3「みちのく」は東北地方。常識として知っておこう！

問五 正解:2

(文学史:梨壺の五人)

私大古文では、代表的な勅撰集と編者はセットで覚える必要がある。

「源順(みなもとのしたごう)」を含む「梨壺の五人(なしつぼのごにん)」が編纂したのは、『後撰和歌集』だ。

- 古今和歌集 → 紀貫之ら
- 後撰和歌集 → 梨壺の五人
- 新古今和歌集 → 藤原定家ら

問六 正解:1

(重要単語:まつりごと)

「まつりごと」とは「祭り」のことではない。「政治」のことだ。

選択肢1「政治を司られた」が直球の正解。

現代でも「政(まつりごと)」という言葉は残っている。迷う余地はない。

問七 正解:4

(読解:文脈把握)

傍線部の直後を見ろ。「うちまかせたることにもその徳多く聞ゆ」とある。

「うちまかす」は「普通だ・並一通りだ」という意味。

つまり、「弓矢の道(武)は、単に敵との勝負だけでなく、日常のありふれたことの中にもその徳(良さ)が現れる」と言っているのだ。

後半の「醜い男がキジを射て妻が笑った(＝夫婦仲が良くなった)」というエピソードは、まさに「敵との勝負ではない、日常の徳」の具体例だ。

よって4が正解。

問八 正解:3

1. 文法:確定条件と仮定条件

本文:「歎き恨みけれども」

ここには過去の助動詞「けり」の已然形「けれ」＋接続助詞「ども」がある。

「～ども」は「～だけれども」という確定条件(実際に起きた事実)を表す。

2. 単語:「恨む」

本文は「恨み(うらみ)」だ。これは「相手の仕打ちを不満に思う」「うらめしく思う」こと。

なぜ3が正解なのか

- ・「恨む」の訳:選択肢3は「うらめしくも思った」となっており、本文の「恨む」を正しく捉えている。

- ・「かひなし」の訳:「かひなし」は直訳すると「効果がない」だが、そこから転じて「どうしようもない」「無益だ」という意味で使われることが多い。

男がいくら嘆いても、不満を言っても、妻の頑なな態度は変わらなかった＝「どうしようもなかった」。文脈としてこれが最も自然だ！

【現代語訳】

（第一段：源頼朝の歌の才能）

鎌倉の右大将（源頼朝）が、父（義朝）子ともに代々の勅撰和歌集にお入りになったことは、格別に優美で殊勝なことである。

なかでも右大将が都へ上られた時に、吉水大僧正（慈円）が、「何事も心に思っているほどには、言葉では言い尽くせませんね（だからこそ歌を詠んでください）」などと申し上げなされた返事に、

（頼朝の歌）

「『言わで忍ぶ（何も言わずに我慢する）』という陸奥の国の名物は、私にはよく分かりません。（あなたの思いを）すべて書き尽くしてください、あの壺の石碑のように」

tips※「言わで忍ぶ」という草の模様と、「言わないで我慢する」を掛けている。

と詠まれたのは、趣深く巧みに聞こえる（感じられる）。

（第二段：文武両道の理）

そもそも武士というのは、乱れた世の中を平定する時、武力を第一とするが、だからといって学問（文）と比べて優劣があるわけではない。

朝廷では、文と武の二つの道を区別して、（政治の）左右の翼としている。「文事（学問や政治）がある時は、必ず武備（軍事的な備え）が必要である」というのはこのことである。

こういうわけなので、中国でも、後漢の武王（光武帝）は武将二十八人を選定して麒麟閣を置き、その功績を記録された。それは舜帝の時に、「八愷（はちがい）」「八元（はちげん）」と名づけて十六人の文士を選ばれたのと同じようなものである。

（第三段：日本と中国の先例）

源順（みなもとのしたごう）が、右親衛源将軍（源雅信）が初めて『論語』の講義をなされた時に、

「職業は武官（虎牙）に連なり、その武勇は漢の二十八将に匹敵するといっても、

学問は抜きん出ており（麟角）、ついにその文章の才能で魯の二十篇（論語）を味わっている」

と書いたそう。これぞまさに文武両道の心である。

また、唐の太宗が、隋の世に代わって政治をお定めになった時、魏徴や房玄齡たちが、天皇の諮問にあずかって、「守文（平和な治世を守ること）」と「草創（国を打ち立てること）」の二つを分けて、文と武のどちらを進め退けるべきかを、それぞれ自分の考えに従って、論争し申し上げた。

（第四段：弓矢の徳のエピソード）

弓矢（武士）の道というものは、単に敵に向かって勝ち負けを決めるだけのものではない。世間のありふれたことの中にも、その徳（恩恵）は多く評判になっている。

『左氏伝』に次のようにある。

買大夫（かいたいふ）という人は、容姿がひどく醜かった。妻となった女性は、これを嫌って、三年の間、口もきかず笑いもしなかった。

男は、悲しみ恨んだけれども、どうしようもなかった（効果がなかった）。

ある時、野に出て遊獵をした際、一羽の雉（キジ）を射てこれを仕留めた。

その時、この妻は、（夫の見事な腕前に感動して）初めてにっこりと笑って、物を言ったそうだ。

【練習問題】

Q1.【重要単語】

次の古文単語の意味として、最も適切なものを一つ選べ。

「やさし」

- A. 他人に親切だ
- B. 優美で上品だ
- C. 簡単で容易だ

Q2.【副詞の呼応】

次の傍線部の現代語訳として正しいものを選べ。

「えこそ言はざりけれ。」

- A. うまく言うことができなかった。
- B. 言わないほうがよかった。
- C. 言おうとしなかった。

Q3.【係り結び】

()内の動詞を、係助詞「こそ」の結びとして適切な形に活用させよ。

「笛の音、いと懐かしく(聞こゆ)。」「

※「聞こゆ」はヤ行下二段活用である。

Q4.【接続助詞の識別】

次のa・bの現代語訳の違いとして正しい組み合わせを選べ。

a「雨降れども、行かむ。」

b「雨降るとも、行かむ。」

- A. a＝「雨が降るので」 b＝「雨が降ったなら」
- B. a＝「雨が降ったけれど(事実)」 b＝「たとえ雨が降っても(仮定)」

C. a=「たとえ雨が降っても(仮定)」 b=「雨が降ったけれど(事実)」

Q5.【古文常識】

次の語句が指す国名として正しいものを選べ。

「唐土(もろこし)」

A. 日本

B. 朝鮮半島

C. 中国

【練習問題の解説】

A1. 正解:B(優美で上品だ)

【解説】

現代語の「優しい(親切)」という意味はない。「瘦す(身が細る)」と同根で、「身が細るほど恥ずかしい」または「身が細るほど優美だ・風流だ・殊勝だ」という意味になる。プラスの意味で使われるときは、Bが正解だ。

A2. 正解:A(うまく言うことができなかった)

【解説】

「え～(打消)」の形を見たら、即座に「不可能(～できない)」と訳す。「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形だ。

「え～ず」＝「～できない」。

A3. 正解:聞こゆれ

【解説】

「こそ」の結びは已然形だ。

「聞こゆ」はヤ行下二段活用(ゆ・ゆ・ゆ・ゆる・ゆれ・ゆよ)。

よって、已然形の「聞こゆれ」が入る。下二段活用の已然形を「～ゆり」などと間違えないで！

A4. 正解:B

【解説】

・「～ども」＝已然形接続＝確定条件(逆接)。「実際に～したけれど」。すでに起きた事実、または確定した事実について述べる。

・「～とも」＝終止形(形容詞は連用形)接続＝仮定条件(逆接)。「たとえ～としても」。まだ起きていない、仮定の話をする。

「ど」は濁るから重い(事実)。「と」は軽い(仮定)。このような覚えよう！

A5. 正解:C(中国)

【解説】

「唐土(もろこし)」は中国のこと。

日本は「大和(やまと)」、「秋津島(あきつしま)」などと言う。